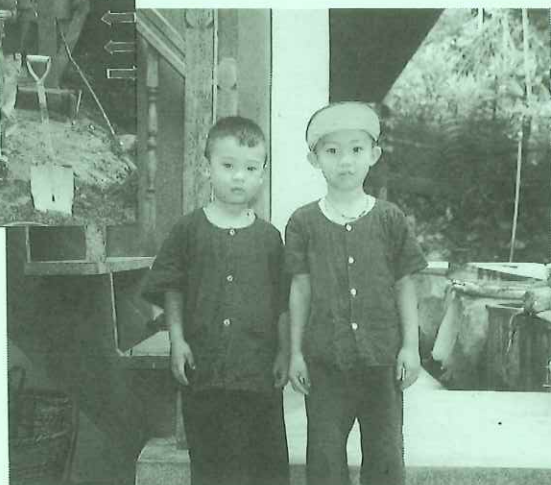


チャン ラック メー カンポーン

Jan Rak Mae Kampong

平成 12 年度

第 9 回鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 溜池 秀美

(青年海外協力隊鹿児島県OB会会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は今回で9回目を迎え、ここに報告書『Jan Rak Mae Kampong「チャン ラック メーカンポーン」(愛するメーカンポーン)』をとりまとめました。

この事業は、青年海外協力隊の活動現場に青少年を派遣し、開発途上国で顔の見える草の根運動の国際協力を実践している隊員の活動を一緒に体験するとともに、訪問国の人々との交流を通して、国際交流・国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としています。

今回は、鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、祁答院町、財部町、末吉町、串良町との共催で実施しました。各市町から推薦された14名(中学生4名、高校生10名)と同行者6名(内2名がマスコミ)で、平成12年7月24日(月)～7月31日(月)、タイ王国のバンコク、チェンマイ県メーカンポーン村を訪問しました。

ホームステイ先となったメーカンポーン村は、タイ第2の都市チェンマイから車で2時間半ほど走ったところであり、人口はわずか126世帯414人の小さな集落です。村人のほとんどが農業に従事し、特産の「ミイヤン」というお茶を発酵させてつくる噛みタバコのような北タイ独特の嗜好品を作り生計立てている村です。海拔が1000mから1300mのところにある村はとても涼しく1日中快適な気温で生活ができます。また、仏教が生活の中に深く浸透しており、僧侶を敬い、厳しい戒律を守りながら誠実に暮らしています。村人は、「微笑みの国」らしく誰もが心の底から湧き出てくる微笑で我々の訪問を温かく歓迎してくれました。

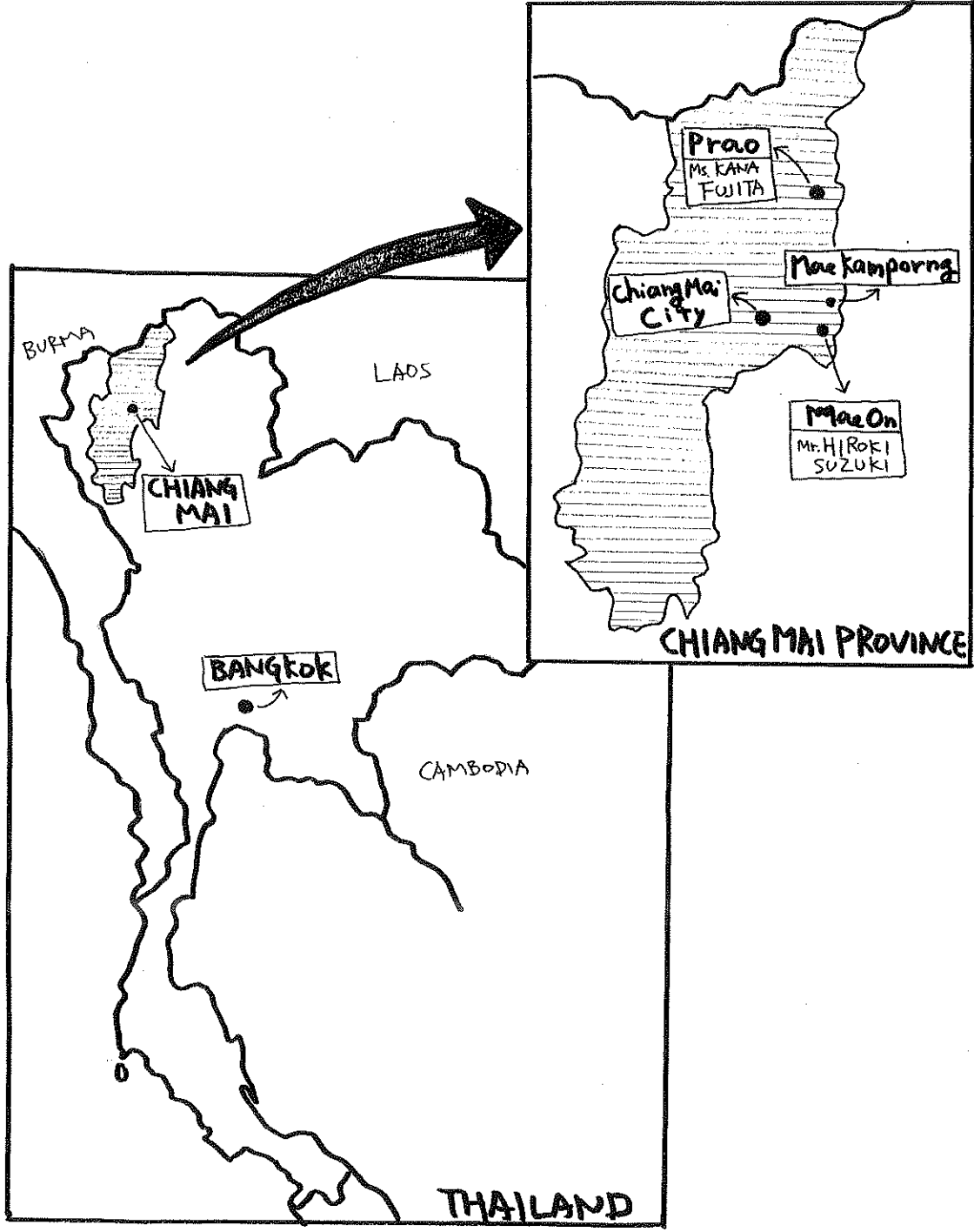
ところで、現在の世界は、相互依存関係が深まる一方で、地球温暖化、酸性雨、自然災害による被災者の救援、難民問題等、さまざまな地球規模の問題をかかえています。これらの問題は私たちの日々の暮らしとも密接に関わっています。私達1人1人が「地球市民」として共に考え、行動することが求められています。

今回の参加者達が、この貴重な体験を鹿児島のため、そして地球のために活かして欲しいと願っています。また、参加した青少年だけでなく、できるだけ多くの方々に彼らの新鮮な感動を伝え、共有してもらうことによって、鹿児島県の国際化に貢献できればと考えております。

最後にこの事業に御協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

タイ概略図

Map of Thailand
Chiang Mai, Mae On, Prao,
Mae Kampong



目 次

◆ はじめに		
鹿児島県国際協力体験事業実行委員会 会長 溜池 秀美		
◆ タイ概略図		
◆ ごあいさつ		
鹿児島県総務部国際交流課長 片 平 芳 美		1
◆ 事業概要		
事業の趣旨, 事業主体		2
訪問団員名簿		3
訪問日程		4
行動の記録		5
◆ 団員報告		
忘れない一週間	岩 川 佳 代	15
タイからの思い	森 陽 子	16
将来への第一歩	山 元 雄 貴	17
私のタイ日記	牧 田 めぐみ	18
成長	園 田 有 美	19
終わりは始まり ～ここから始めたいこと～	中 神 沙弥香	20
タイに行って	大 山 千代美	21
四日間のホームステイ生活	肥 後 朋 子	22
タイ王国を訪れて	福 岡 奈々恵	23
タイで学んだこと	柳 田 香 織	24
「青少年国際協力体験事業」に参加して	川 畑 亜利沙	25
「青少年国際協力体験事業」に参加して	堀 内 みなみ	26
「青少年国際協力体験事業」に参加して	官 原 亜 弥	27
タイ王国チャンマイを訪ねて	南 佐貴子	28
◆ 第9回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて		
団 長 溜 池 秀 美		29
◆ メーカーポーン村ホームステイ先配置図		30
◆ 事業関連のスナップ記事		31
◆ 事業関連の新聞記事		33
◆ 同行者一口メモ		40

ご あ い さ つ

鹿児島県総務部国際交流課長

片 平 芳 美

平成12年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

我が国の青年海外協力隊は、今年で35周年を迎えますが、鹿児島県は、人口10万人あたりで換算した青年海外協力隊員の派遣者数が全国1位であります。

こうした活発な活動は、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会及び青年海外協力隊鹿児島県OB会が中心となって、支えてきておられます。

そういった中、この体験事業は、21世紀を担う青少年を、日本の国際協力の最前線を担う青年海外協力隊の活動現場に派遣し、実際にその活動を体験するとともに、訪問先国の皆さんと交流することによって、国際協力に対する理解を深めることを目的として全国でも先駆的に行われ、今回で第9回を迎えました。

今回は、前回に引き続きタイ王国を訪問され、青年海外協力隊の活動や、寺院での体験活動、スポーツ交流やホームステイなどを通じてタイ王国の皆さんと交流され、団員の皆さんが文化や言語、生活習慣など、日本とは異なった環境の中で、苦しかったことや楽しかったことなど思い出深い貴重な体験をされ、たくましくなった皆さんを頼もしく感じました。

今回のこの貴重な体験を、御家庭や学校、あるいは地域社会でお話をさせていただくとともに、皆さんの今後の人生や社会生活に活かしていただきたいと考えております。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会及びこの事業の実施に当たり御支援・御協力を賜りました国際協力事業団並びに青年海外協力隊の皆様にご心から敬意を表しますとともに、この事業の今後一層の充実、御発展を祈念いたします。

事業概要

(事業の趣旨)

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともに、ホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し、地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

(事業主体)

主 催 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

<構成団体>

青年海外協力隊鹿児島県OB会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

財団法人 鹿児島県国際交流協会

共 催 鹿児島市，鹿屋市，国分市，垂水市，祁答院町，財部町，末吉町，串良町

後 援 国際協力事業団九州国際センター，鹿児島県，鹿児島県教育委員会

協 力 タイ大使館，日本航空（株）

組 織 会 長 溜池 秀美（青年海外協力隊鹿児島県OB会会長）

副 会 長 北田 定雄（財鹿児島県国際交流協会専務理事）

事務局長 弓場 秋信（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会事務局長）

監 事 浜崎 研（財鹿児島県国際交流協会事務局長）

訪 問 団 員 名 簿

● 訪問団員（青少年）14名

氏 名	学 校 名	学 年	推薦自治体
岩 川 佳 代	鹿児島玉龍高等学校	2年	鹿児島市
森 陽 子	鹿児島女子高等学校	2年	鹿児島市
山 元 雄 貴	鹿児島商業高等学校	2年	鹿児島市
牧 田 めぐみ	鹿屋女子高等学校	1年	鹿屋市
園 田 有 美	国分高等学校	1年	国分市
中 神 さやか	開陽高等学校	3年	国分市
大 山 千代美	垂水高等学校	3年	垂水市
肥 後 朋 子	祁答院中学校	2年	祁答院町
福 岡 奈々恵	財部高等学校	3年	財部町
柳 田 かおり	財部高等学校	3年	財部町
川 畑 ありさ	末吉中学校	2年	末吉町
堀 内 みなみ	末吉中学校	2年	末吉町
宮 原 あや	南之郷中学校	2年	末吉町
南 さきこ	鹿屋中央高等学校	3年	串良町

● 訪問団員（同行者）6名

溜 池 ひでみ	青年海外協力隊鹿児島OB会 会長	団 長
酒 井 マリ	鹿児島県海外青年協力隊を支援する会 JICA国際協力推進員	
森 永 やすし	財団法人鹿児島県国際交流協会 主査	
高 木 ゆめ	青年海外協力隊OG	
寺 原 きみちか	(株)南日本新聞社 政経部記者	
田 中 しゅうご	(株)鹿児島読売テレビ 制作部副部長	

訪 問 日 程

- 派遣国：タイ（訪問地－バンコク、チェンマイ）
- 期 間：7月24日（月）～7月31日（月）
- ホームステイ先：チェンマイ県メーカンポーン村
- スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月24日	月	鹿児島空港 香港 香港 バンコク	09:30 11:05 13:10 15:30 17:10	JL755 TG629 バス	結団式（鹿児島空港国際線ターミナル特別待合室） 鹿児島より空路香港乗換えでバンコクへ 到着後ホテルへ	ホテル
7月25日	火	バンコク バンコク空港 チェンマイ メーカンポーン	09:30 11:15 15:15 16:25 17:00	バス TG114 4WD	JICAタイ事務所訪問 TVS事務所訪問 村でホストファミリーと対面式	ホームステイ
7月26日	水	メーカンポーン	06:30 08:00 09:30 14:00		寺院での体験活動 寺院での朝食 ・ホストファミリーと村周辺の視察（2 班に分かれて） メーカンポーン小学校訪問 生徒たちと文化、伝統芸能などの交流 活動	ホームステイ
7月27日	木	メーカンポーン プラオ メーカンポーン	07:00 10:00 15:30	4WD	プラオ地区を訪問 ・プラオ社会開発支援センターで青年海外 協力隊員（藤田可奈隊員／村落開発 普及員）の活動視察 メーカンポーン村で交流	ホームステイ
7月28日	金	メーカンポーン Mae On sub メーカンポーン	08:30 10:00 14:00 19:00	4WD	Mae On sub 地区を訪問 ・チェンマイ苗畑センターで青年海外協 力隊員（鈴木宏紀隊員／植林）の活動 視察 メーカンポーン村での協力活動体験 お別れパーティー	ホームステイ
7月29日	土	メーカンポーン チェンマイ空港 バンコク空港	09:00 15:15 16:25	4WD TG113	ホストファミリーとお別れ チェンマイ市内観光など	ホテル
7月30日	日	バンコク	終日	バス	バンコク市内観光など	ホテル
7月31日	月	バンコク 香港 香港 鹿児島	08:40 12:35 14:10 18:00	JL702 JL756	香港乗換えにて鹿児島へ	

行動の記録

● 6月24日（土）

○第1回事前研修（場所：国際交流プラザ）

国際協力事業団九州国際センターの伊坂潔所長を講師に迎え、JICAや青年海外協力隊の仕事また日本の国際協力等について学ぶ。

● 7月8日（土）～9日（日）

○第2回事前研修（場所：アジア・太平洋農村研修センター）

タイ出身の嶋崎ジャルワンさんや青年海外協力隊OB等を講師に迎え、タイ語の学習や現地の交流会で披露する出し物・タイの歌の練習を行う。

夜遅くまで続く特訓に団員も必死でがんばっていた。

第1回 事前研修 →



← 第2回 事前研修

●7月24日(月)

○結団式(鹿児島空港国際線ターミナル特別待合室)

- ・激励(鹿児島県国際交流課課長補佐 岩元 薫)
((財)鹿児島県国際交流協会専務理事 北田 定雄)
(鹿児島市国際交流課主幹 松澤 茂)

- ・団員あいさつ(1人ずつ参加の動機と抱負を日本語とタイ語で発表)

○鹿児島空港発(新香港国際空港経由)

家族の元を離れる不安と初めての海外への期待でやや興奮気味の団員をのせ鹿児島空港を後にする。
経由地の香港空港では、現地の交流会で披露する剣道を練習する団員やタイへ向かう飛行機の中でタイ語の復習をする団員の姿も見られた。

○バンコク国際空港到着

現地時間の午後5時過ぎにバンコクへ到着、熱気と大都会の喧騒が長旅で疲れた団員を出迎える。バスの車窓から見える高層ビルとスラム街のアンバランスな光景に一同カルチャーショックを受ける。

(ホテル宿泊)



← 結団式
あいさつをする溜池団長



← バンコクに到着して

●7月25日(火)

○国際協力事業団(JICA)タイ事務所

今回のタイ訪問の目的の第1は、日本の国際協力について学ぶこと。

まず、国際協力事業団(JICA)タイ事務所を訪問し、職員の林敬子さん、調整員の落合さんからタイで働く青年海外協力隊や派遣専門家の活動について説明を受ける。タイの青年海外協力隊は、現在58名(男性21名:女性37名)で女性の隊員の方が多く派遣されているとのこと。女性パワーはタイでも強し。その後、団員からも「現地で隊員はどのように思われているのか。」「隊員として嬉しいことは何か」など活発な質問も出された。

○TVS(Thai Volunteer Service)訪問

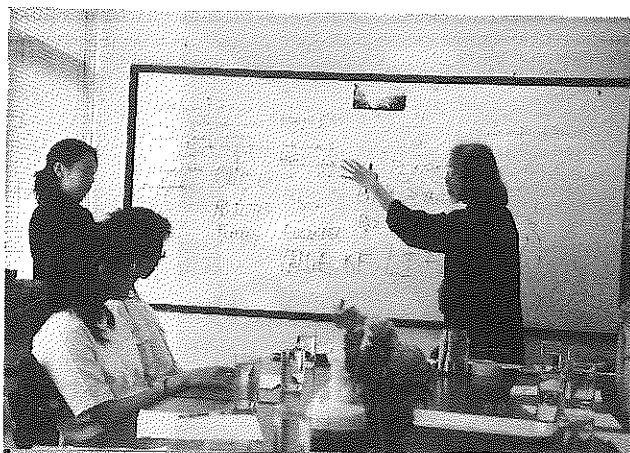
前回に引き続き、村でのホームステイの委託をしたTVSを訪問する。

タイ語で1人ずつ自己紹介した後、理事長のDef Poomkacha氏から、意義のある人生とは何か。ボランティア精神とは何かなど”いいボランティア”になるための講義を受ける。

※いいボランティアとは ①筋の通った行動ができる。②開かれた人間であること。③学ぶことが好きな人である。④飽きっぽくないこと。⑤自分の関係ないことにも関心を持つ。⑥今日からはじめること。⑦強い意思を持つ。⑧同情する気持ちを持つ。⑨現実を見つめる。など



← JICAタイ事務所にて
林敬子さんと落合調整員から
説明を受ける



← TVSにて
理事長のDefPoomkacha氏から
ボランティアについて講義
中

○チェンマイからメーカンボーン村へ

バンコク空港からチェンマイ空港まで約1時間。そして、さらに車に乗り換え、2時間半かけてホストファミリーの待つメーカンボーン村へ

村の入り口付近はまだ舗装されていないため、雨期で赤土がぬかるんでいる道路を4WDに乗り換えやっとのことで村にたどり着く。

村の集会場には大勢の村人が出迎えてくれた。

○対面式

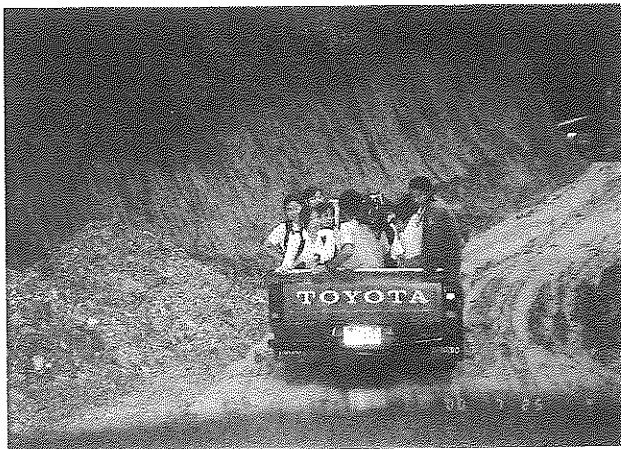
午後7時ごろメーカンボーン村へ

周りも少しずつ暗くなってきたので、急いで対面式を行う。

プロミン村長の歓迎の挨拶の後、1人ずつホストファミリーと対面する。

お互い照れくさそうにしている。1人また1人と手を引かれてそれぞれの家に帰って行く。

(ホームステイ)



← 4WDに乗り換えて
村へ入る様子



← 対面式にて
初めて会うホストファミ
リリーと堅い握手

● 7月26日（水）

○お寺にて

一夜明けて、月に4回ある仏教の日のため朝早くから村のお寺に集まる。

団員も民族衣装を着せてもらってすっかり村の一員になっている様子である。

中には村の娘さんとお見分けのつかないくらい馴染んでいる団員の姿も。

花や食べ物をお供えした後、チャオワー住職のお経や法話を聞く。

その後、先ほどお供えした食べ物を皆で食べる。日本では味わえない料理や果物が何皿にも分けて並んでいた。

○体験活動

2班に分かれ4種類の仕事の体験を行う。

1班 竹で編んだ帽子作り、バナナのお菓子作り

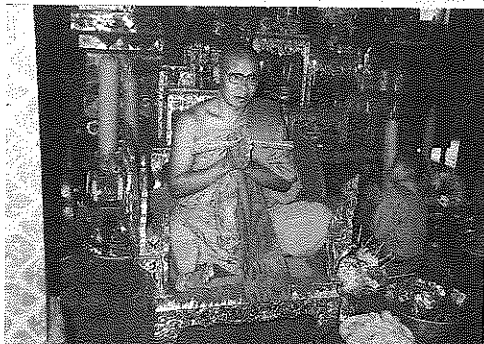
- 婦人グループの農閑期の副業として村で簡単に手に入る竹を使った帽子作りを体験。見た目は簡単に出来そうであるが、作るのには熟練を要すること。
- バナナのお菓子作りは、村長婦人が中心となり活動している。スライスしたバナナを油で揚げて砂糖をまぶしたお菓子。とても美味しかった。

2班 ミイヤン（嚙むお茶）の収穫、薬草作り

- ミイヤンは標高の高いこの村の特産物である。現在収穫のピークを迎え、朝から夕方まで収穫に汗をかいている。夜は収穫したミイヤンを蒸す作業を行っている。
- 村で採れる薬草を乾燥させて薬を作っている現場や手作りの半畳ほどの薬草サウナを見学する。



← 村人と一緒にチャオワー住職のお経や法話を聞く



チャオワー住職



竹で帽子を編む団員

○メーカンボーン幼稚園・小学校を訪問

村の人口は、126世帯414人で、うち幼稚園と小学校に58名が在席している。

小学校では、パナ・カンゴン校長に学校の概要について説明を受けた後、団員が鍵盤ハーモニカやレコーダーで日本の音楽を披露した。村の子供達からも鍵盤ハーモニカで”ロイカトン”と言う音楽のお返しがあった。

文化交流の後、小学3年生のタイ語の授業を見学した。子供達の興味のあることで授業に引き付け、文章を作らせたり、書かせたり、たまには賞品を出したりして、皆が協力して、授業を進めていくとのこと。

その後、麓の村に通学している中高校生も加わってスポーツ・文化交流をする。

バレーボール、セパタクロー、フリスビー、折り紙等言葉の壁は感じさせないくらいに自由に伸び伸びと村の子供と団員が一緒になって交流していた。

(ホームステイ)



授業風景



風船



折り紙



バレーボール

●7月27日(木)

○プラオ社会開発支援センターの藤田可奈隊員を訪問

村を出発して、約3時間かけてプラオ地区へ。

ウイト所長から歓迎のあいさつ、そして、センターの役割等の説明を受ける。

その後、藤田隊員が現在指導している開拓地へ移動する。

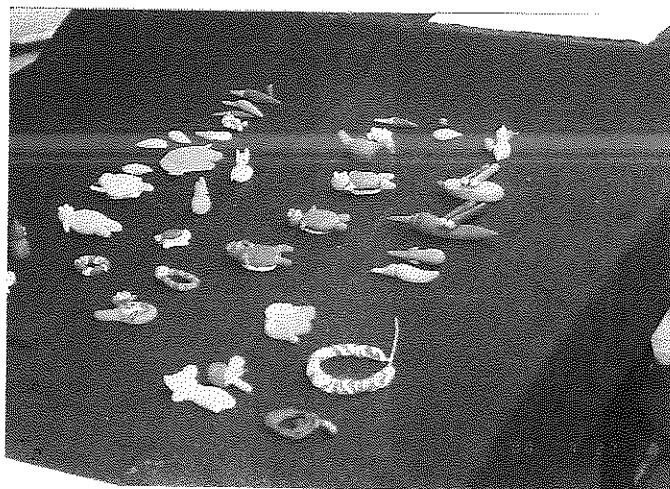
藤田隊員は、婦人グループの増収プログラムとして粘土でブローチなどのアクセサリーや小物の製作を指導している。

団員にも商品開発の手伝いとして、団員が考えたデザインを实际作らせてくれた。様々なアイデアのもと沢山の試作品が出来上がった。果たして商品になるデザインが生まれたかな。

(ホームステイ)



← 婦人グループの方から粘土で小物の製作の指導を受けている。



← 団員自らが作った作品

●7月28日(金)

○チェンマイ苗畑センターの鈴木宏紀隊員を訪問

鈴木隊員からセンターの役割や現在行っている植林の啓発活動の状況（鈴木隊員が作成したパンフレットやポスターを見せてもらったりした）の説明の後、実際に育苗している場所を見学させてもらう。日本にはない珍しい木や植物に団員も興味をもった様子である。

最後にシベブヤルアンという幼木を記念に1人1本ずつ植樹した。木が大きくなった頃また見に来てほしいと鈴木隊員の言葉。

○村への贈り物

村人や観光客の憩いの場として休憩小屋を贈呈した。団員が村に入った頃に建て始め、今日が完成の日。最後の仕上げは団員が行い、セメントをバケツリレーで運び、床をコンクリートできれいに仕上げた。

○お別れパーティ

夕日が落ち、辺りがすっかり暗くなりった村、お別れパーティの開催される小学校だけは、ステージがきれいに飾り付けられ、村人が最後の別れを惜しむように大勢集まっている。お菓子売る屋台まで出るにぎやかさだ。

まず、僧侶にお経を唱えてもらい、村長から団員の幸せと無事な帰国を祈願して白いひもを両手首に巻いてもらう。

その後、ステージ上は日本とタイの文化交流の競演の場となった。

日本からは民謡・書道・ダンス等を披露し、お返しにタイからは伝統的舞踊ろうそく踊りなどが披露された。

出し物の後でホストファミリーも壇上に上がり、お互い感想などを述べ合ったが、感極まり思わず泣き出してしまう団員もいた。

(ホームステイ)



記念植樹 “大きくなあれ”



村人と一緒に建設した休憩小屋



お別れパーティー



村の子供たちの舞踏

●7月29日(土)

○ホストファミリーとのお別れ

本当の別れの朝がやって来た。対面式をした村の集会場に団員が少しずつ集まってくる。単車に乗せてもらってくる者、お母さんに手を引かれてくる者。

村長のお別れのあいさつがすんでから、みんなで練習したタイのお別れの歌を歌う。涙で声の詰まる団員。目の前に来た別れの瞬間に皆うつむき加減である。

用意された車に乗りこみ、窓越しに最後にお別れをする団員、涙で目を真っ赤にして泣いている。

短い滞在期間ではあったが本当の家族のように接してくれたメーカーンポー村のみなさん本当にありがとう。

こうして、私達の4泊5日のホームステイは終わった。また、"いつの日にか必ずこの村に帰ってこよう。" みんながそう心の中で呟いたのが聞こえるような感動的なホームステイだった。

○チェンマイ市内観光

ワット・スアンドークやワット・チェデイ・ルアンなどの寺院を訪問

午後チェンマイ国際空港からバンコク国際空港へ移動



ホストファミリーとのお別れ



お別れの歌を歌う団員

●7月30日(日)

○終日バンコク市内観光

ワット・アルン(暁の寺院), ワット・プラケオ(エメラルド寺院)等を訪問する。

●7月31日(月)

○バンコク国際空港発

○鹿児島空港着(新香港国際空港経由)

全員無事に鹿児島に到着。

●8月3日(木)

○県庁表敬訪問

県庁18階の特別会議室において月野総務部次長に帰国の挨拶や事業推進の協力に対して感謝の意を表す。

●8月19日(土)

○報告会

事業の体験を大勢の方に伝えるため財部町中央公民館集会場において報告会を開催した。報告会では、タイで撮影したスライドを写しながら団員の1人1人がそれぞれの体験を聴衆約80人を相手に報告した。その後、嶋崎ジャルワンさんがタイ舞踊を披露し、みんなで一緒にタイ舞踊を踊った。



無事鹿児島に到着



タイの感想を発表する団員



月野総務部次長と一緒に

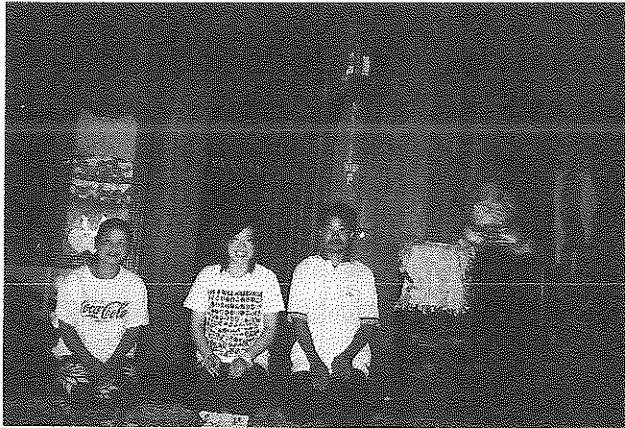


報告会にて 会場の質問に答える

忘れない1週間

岩川佳代

(鹿児島玉龍高等学校2年)



「国際協力」今までに考えた事のない、私とは無縁の言葉であった。つい2週間前までは。2000年7月24日から7月31日までの1週間タイ王国訪問。これは、「国際協力」という言葉が、そしてその現場が、意義が、私の中にしっかり根を張るきっかけとなった。その「国際協力」のひとつであり、今回私たちが間近に見たもの - 「青年海外協力隊」

あなたは「青年海外協力隊」という職業にどのようなイメージを持つだろう。堅苦しい人たちばかりの、大変な重労働をとまなう職業というイメージを多くの人たちは持つだろう。しかしそんな考えは捨ててほしい。今回私たちは2人の隊員を訪問した。一人は若い女性隊員、藤田隊員。藤田隊員はタイの北部チェンマイにあるプラオ開拓地というところで、副収入を目的とする婦人会で活動している。現在は、紙粘土を使ったアクセサリーや小物などを作り、店で販売している。今回は私たちも、これからの新商品となるアイデアやデザインを一緒に考えた。きっとこれだけの事でも、国際協力となるのだろう。国際協力 - それはどんな人でもできる事なのだ。藤田隊員は言う。2年間しかないけれど、人々の心に残る何かを植えて帰りたい、と。なにも、隊員が先頭に立ち、中心となり引っ張っていくような仕事ではない。外の方で人々を持ち上げていく。想像よりはるかに地味な、しかし楽しみのある、生きがいの

ある職業、国際協力の一つなのだ。私には、2年間強く持ち続けた客室乗務員という夢があった。しかし2人の隊員の活動を視察し、国際協力の大切さ、そしてこの職業の楽しさを知り、私の中に、「なりたい。」という気持ちが生まれた。

国際協力を始めるとしたら、最初に重要になるもの、国際交流がある。私たちはそれを、ホームステイという形で体験した。1日目、困った事がいくつかあった。まず言葉が分からない。私が言いたい事は、指さし会話帳を使って伝えられる。しかし家族が何を言ってるのか分からなかった。次にお風呂が困った。チェンマイは寒い。しかしお湯なんてない。水浴びなのだ。4日間続けられるのか。不安でいっぱいだった。けれど次の日、何故か分からないが、言葉がよく分かる。食事をしながら、これは日本にはないとかあるとかそんな話をしたりした。8歳の男の子と私が日本から持ってきたビーチボールで、タイ語で数を数えながら、ボール遊びをした。とにかく家族と、たくさん笑った。水浴びだって慣れた。次の日は、お父さんとお母さんの仕事の手伝いもしたりした。帰る前日、お父さんは私に言った。私を本当の娘のように思っていると。お父さんもお母さんも私を愛していると。日本に帰したくないと。私も伝えたい事がたくさんあった。けれどどう言っているのか分からなかった。その事だけを、今一番後悔している。

とうとう帰る日がやって来た。お母さんは私の手をずっと握っていた。目には涙を浮かべていた。少し離れた所で私を見ていたお父さんにお礼を言いに行くとたん、こらえていた涙は溢れ流れた。あんなに辛い別れは初めてだった。家族はとても優しくかった。村の人たちも。いつかまた、必ず、あの村に戻ろうと思う。今回のタイ訪問が私を大きく成長させてくれた。将来、今度は訪問ではなくて国際協力であの地にいたいと思う。

タイからの思い

森 陽 子

(鹿児島女子高等学校2年)



私は以前から青年海外協力隊に興味があり、この体験事業へ参加した。直接、協力隊の人々の姿を見ることができて本当によかったと思う。そして、協力隊の方々の仕事に対する熱気などがとても新鮮な感じがした。いろんなことに真剣に取り組むということは、苦労もするがうまくいったときの喜びや感動は、すばらしいものなんだと思った。協力隊とは、一方的な指導者ではなく、互いが助け合って協力し合って成功させていくものだとは私は思った。実際に見ることによってこう思った。

私達はタイで2回ほど木を植えた。1回目はチェンマイの植林センターで、2回目はステイ先のメーカンボーン村にある滝でだ。驚くことは、タイは日本と比べても森林の数が少ないということだ。そこで私達も木を植えたのだが、自分の植えた木が1本でも多く立派に成長し、タイの大地に大きく根づいてくれるとうれしい。ここのセンターの人が言った言葉も印象的だった。「みなさんの心にも木を植えて下さい。そしてその苗木を多くの人に分けて下さい。」という言葉だった。なんて素敵な表現なのだろうかと感動し、この意味の深さにも心が大きくなるのを感じた。

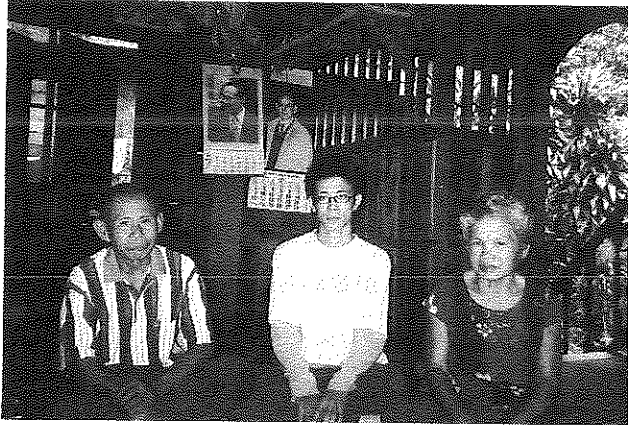
メーカンボーン村の人々は本当にみんなやさしい人達ばかりで、とても笑顔が素敵だった。そしてあの村の貴重価値はとても大切だと思った。村長をはじめ、私を受け入れてくれた家族に出会えてとてもよかった。私がもう1度村を訪れた時、あの村の景色と人々の温かさが変わらないままであってほしいと思った。

タイは貧富の差が実に大きい。私は村ではこんなことは少しも感じなかったが、それは村が立派なところであったという証拠でもあると思う。しかしバンコクではこれを強烈に感じた。タイの車の値段は、日本の約1.5倍以上もするらしいが、バンコクは世界一の車の渋滞国だ。しかもやたらとベンツやBMWなどの外車が目立った。また、極端に観光客相手に物売りをする幼い子供もたくさんいた。この両極端な国で私は日本のことを考えた。日本で今起きている多くの少年犯罪、学校などでのイジメだ。しかし、子供が学校にも行けずに食べる為に働いているのだと思った。日本には、皆がちゃんと生きていける力があると思った。また、私はこういった姿を見ることによって、いろんな価値観が変わった。これは、協力隊や村の人々、バンコクの姿を見て変わったことだと思う。そして、自分や家族の将来、協力隊になりたいという思いから、今までの考え方から動き、やはり根っこが大切だと思った。自分自身、今やれること、毎日を一生懸命に生きていこうという、前向きな考え方が私の中から出てきた。こんなにも良い経験ができ私はラッキーだった。そしてこれを通じてできた仲間たちや力になってくれた先生や家族に感謝をしています。このように、今まで経験できなかったことに出会えてよかった。

将来への第一歩

山元雄貴

(鹿児島商業高等学校2年)



僕がこの事業に参加した理由は2つある。1つ目は、日本とタイの食文化がどう違うのかということと、2つ目は青年海外協力隊の人達の仕事が見たかったからだ。

まず日本との食文化の違いはとにかく味がはっきりしているところだ。辛い物は辛く、甘い物はとにかく甘い。スープには唐辛子1本分が切り刻んで入っている。僕が「辛い」とタイ語で言っても笑いながらスープを入れてくる。2杯目のところで「お腹いっぱいだからいい」と言った。本当は、お腹が減っていた。それ程辛かった。次に「飲み物を下さい。」と言うと、練乳、砂糖、ココアの粉をコップの3分の1くらいのところまで入れお湯を注いでいた。スプーンで10秒くらいかき混ぜても底の方で砂糖や練乳が踊っていた。味は予想通り甘すぎて、気持ち悪くなってきた。しかし口に合わない物ばかりじゃない。ご飯と辛みの強いスープを一緒にかけて食べると絶妙においしかった。

そして、この事業の参加動機の2つ目の協力隊員の活動状況を見ての感想は、初めは地味な仕事と思っていた。しかし、実際のところ、自分たちの手で苗を植えたり、商品化しようと思っている物を考え、

それを手作りでアクセサリーを作ると言う、協力隊員の人達の努力というものがかかってきた。現在、僕らが住んでいる鹿児島県は協力隊で海外に派遣されている人は、全国でもトップのほうだと聞き、鼻が高くなったような気分になった。あいにく今回訪れた隊員達は県出身ではなかったが途上国に行き、自らの手でその国を何とかしていきたいという思いはどこの人であろうと変わらないという事を学んだ。その気持ちを忘れず素直な心で大人になっていきたい。

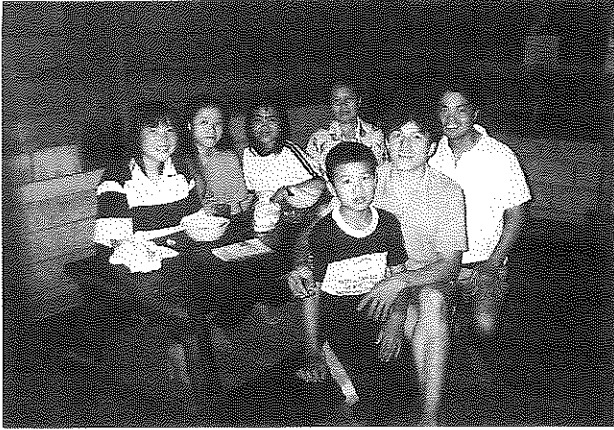
また、僕達は、ホームステイを終え村を出た後に、チェンマイやバンコクの寺院等の視察もした。チェンマイでは昔の偉い人の墓に行き、またドリアンなど珍しい果物も食べた。首都バンコクでは大きい町や寺院に行き、チャオプラヤ川を眺めての海鮮料理などを食べた。そこで初めて僕は、世界のスケールの大きさを満喫した。

近い将来、僕は外国に留学したいと思っているが、今回のこの事業でその第一歩を大きく前進したような気がした。初めての海外渡航がタイで本当に良かった。この初海外渡航で得た多大なカルチャーショックを忘れず、初心に戻りこれからを歩んでいきたいと思っている。最後に、この事業を共にしてきた14名が8日間にわたり助け合いながら活動できて本当に良かったです。あと、自分達の身の回りの安全の確認などをしていただいた6名の同行者のみなさん、本当にありがとうございました。

私のタイ日記

牧田 めぐみ

(鹿屋女子高等学校1年)



7月24日、この日私にとって人生初の海外「タイ」という国に足を踏み入れた。

タイの首都、バンコクをバスで走り、バンコクの風景を目の前にして私は、日本との違いに、驚きを持ち、茫然とした。バンコク市内の町は、一見、巨大な高層ビルが立ち並び近代的なイメージを持ったが、よく見ると、巨大な高層ビルの下には、木造の古い小さな家々のスラム街が建ち並び、貧富の差の激しさを感じ、途上国の現状を、目の当たりにした様な気がした。

次の日から、ホームステイをした。タイの北部にあるチェンマイという所の山奥にあるメーカンポーン村に4日間お世話になった。ホームステイ先の家に着いてからは、やはり言葉の壁に、ぶつかった。最初は、自分の伝えたい事が伝わらなく、相手の伝えたい事も私には伝わらないで、家族の人達とのコミュニケーションに戸惑っていた。でも、家族の人達は私に、いろいろな事を聞いてきてくれ少しでも多くの事を話そうとしているのが、私に、伝わってきた。私も、それに応えようと、本の単語をたくさん引き、自分のことを知ってもらおうと一生懸命だった。

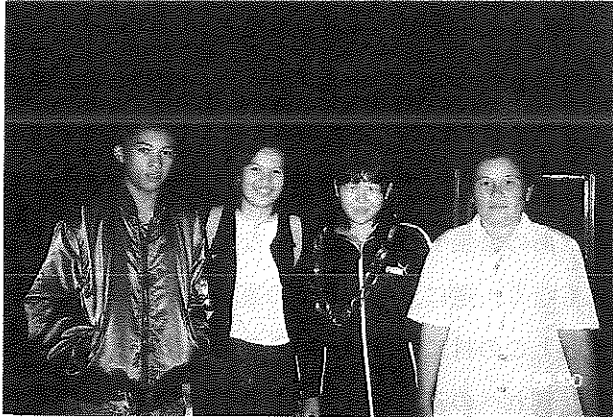
そんなこんなで、片言の言葉とジェスチャーで、4日間もたつと、ホームステイ先の家族とは、本当の家族のように親しくなっていた。5日目の別れの朝に、最初来たときと同じ場所に集まり、最初の日の、あの緊張や不安、戸惑いなどの気持ちは、どこにもなく、逆に、もっとこの家族と一緒にいたい、もっとこの村にいたいという気持ちでいっぱいになり、別れへの寂しさと、悲しさで、涙が止まらなくなっていた。家族の人に「また会いましょう。」(ヂューカンマイ)と言われ、車に乗り村とさよならをした。

私は、この事業に参加させてもらい、青年海外協力隊の2人の方の仕事を見学し、2人共、自分の仕事に誇りを持ち、生き生きとしている姿を見て、私も将来、自分の仕事に誇りが持てるような仕事ができればと、2人の方に憧れを抱き、メーカンポーン村で出会った人々、家族の人達の人情の温かさに触れ、改めて、家族との交流を大切にしていこうと思う。そして私自身、一番成長したと思う事は、たとえ異国の地で言葉が片言で、通じなくても、このタイという国の人達と触れ合い楽しむことが、私にもできたのだという、自信が持てた事が一番の収穫だったと思う。最後に、この事業でたくさんの貴重な体験をし、この旅で会うことができた村の人達、団員の人達に、心から感謝したいです。

成 長

園 田 有 美

(国分高等学校1年)



鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加し、たくさんの人に出会うことができました。今まで日本で不自由なく暮っていた私は、タイで昔の日本の40年前の生活を体験しました。私が、ホストファミリーについて一番印象に残っていることは、今の日本ではあまり見られない、家族が一同となって働いていたことです。

私は、ホームステイ先でタイ語に訳してきた、『浦島太郎』を紹介しました。このことで家族とコミュニケーションがとれました。日本の家庭料理、キンピラ御坊を作ったら、お母さんがとてもうれしそうに顔をしておいしいとってくれました。覚えただけのタイ語は発音が悪くてなかなか通じなかったけれど、一生懸命分かってくれようとしてくれました。

家族は、すごく辛いものやすごく甘いものが好きで、私は少ししか食べれませんでした。しかし次の日から、「これは辛いよ。」と教えてくれるようになりました。

こんなに優しい家族だから別れがとっても悲しかったです。しかし、お母さんが新しい子供ができたようで嬉しいとってくれました。その言葉は、一番

の思い出となりました。

私は、今回の旅で、世界中の人が長生きできるように、将来栄養士として働くことが夢です。私の憧れの人は、今回の事業で活動を視察した青年海外協力隊員の藤田さんと鈴木さんです。藤田さんは農村の婦人グループを対象に、もう少し子供にごはんや教育をとということで手工芸品を作っていました。鈴木さんは、タイにおける植林の普及活動をしていました。タイは森林がいっぱいあるそうですが、今はおよそ国土の25%しかないそうです。私は、二人の活動を見て協力隊員はすごく難しいことをしているのかなと思っていました。しかし生き生きと笑いながらとてもうれしそうに働いていてすごく魅力的でした。それに、たくさんの人に出会っていました。自分にいいことをするよりも人にいいことをする方が倍うれしいことなんだろうなあと思いました。いろんな人に出会うことでボランティアは始まると学びました。私も出会いを大切にしたいと思います。

私は、タイに行ったことで、やろうと思ったことができるようになりました。しかし私はまだ、学校で夢のために勉強をしていて家族に支えてもらっているのです。まだ炊き上がっていないお米です。これからたくさん新しい知識を身に付けて、いろいろな体験をしておいしいお米に炊き上がりたいです。そしていい大人になりたいです。

終わりは始まり ～ここから始めたいこと～

中 神 沙弥香

(開陽高等学校通信制3年)



「今タイについて知らないことを知りたい。」

そう思ってこの事業に参加したのですが、鹿児島国際空港での結団式からずっと「私のタイ語は通じるだろうか。」「ホストファミリーと仲良くなれるだろうか。」など不安がいっぱいでした。

メーカンポーン村でのホームステイでは不安は一部分の中した。最初、言葉があまり通じなかったのですが、ホストファミリーのお父さん、お母さん、近くに住んでいる親戚の人とても温かく接してくれました。それに家でいつの間にか親戚の人がテレビを見ながらくつろいでいたり、一緒に御飯を食べていたりするなど家族の垣根をあまり感じませんでした。

また、村では洗濯は手洗い、お風呂は水浴び、トイレは紙を使わず水洗いで、最初は不便に感じることもあったのですが、慣れてくるとそれが当たり前のことに思えてきて、却って、日本の生活は機械に頼りすぎているような気がしました。

タイには多くの青年海外協力隊員が派遣されていて、私はタイ北部のチェンマイ県で活動している、村落開発の藤田可奈さんと植林普及の鈴木宏紀さんを訪問しました。

藤田さんは開拓地の婦人グループの農業外増収を

はかるため、色粘土で作った小物をタイ国内外に売り出すプロジェクトを始めていて、私達は小物のデザイン案を考える宿題を出されていたのですが、どんな物が、どうすれば売れるのか考えるのは難しかったです。

でもその後でグループ内でもめ事が起こりつつあると聞いて、何をするにも人間関係は大変なんだと思いました。

鈴木さんが活動しているチェンマイ苗畑センターでは、年間140万本の苗木を育てて、欲しい人に配っているそうなのですが、タイでは林業という考え方が元々無いため、せっかくの苗木を枯らしてしまう人もいて、そのため鈴木さんがパンフレットなどを作って地域住民に植林についての知識を広げているそうです。

藤田さんと鈴木さんの活動現場訪問で印象に残ったのは、お二人ともそれぞれに大変な仕事で、問題もあるけれど「海外で働くことは楽しい」と言われていたことです。

私が将来したい仕事は日本で働くことが主なのですが、今は日本語教師の仕事にも興味が出て来てどちらにしようか迷っています。

でも、どちらにするにしても自分の仕事に誇りを持って「楽しい」と言えるような人間になりたいと思っています。

私はこの事業に参加して、タイに行く前は知らなかったタイの事をたくさん知る事が出来て、タイが大好きになりました。

それに、ホームステイで大好きな家族と出会うことが出来ました。

これを終わりにせずに、ここからタイの家族との長い交流を始めたいと思っています。

タイに行って

大 山 千代美

(垂水高等学校3年)



初めて訪れるタイへ着いた時、私はタイの首都バンコクの大きさに驚きました。立ち並ぶ高層ビル、高速道路や一般道の車の多さには、途上国とは思わせないものがありました。しかし、そんな中でも、スラム街のような、貧しい人々が生活している風景も時々見られました。そういうところに私は貧富の差というものを感じさせられたような気がします。

私が一番心に残っていることは、メーカンポーン村でのホームステイです。メー（お母さん）に手を引かれながら、家へ案内されました。家に着くと、早速自己紹介をしました。しかし、私はそれからうまく会話をするできませんでした。言葉の壁の厚さを実感しました。夕食もタイ料理で、タイ米ののった皿におかずを自分でのせてフォークとスプーンを使って食べます。初めはうまくできなくて、あまり食べられませんでした。でも、慣れてくると、うまく使えるようになりました。もち米は、手を使って食べます。私は、初めての体験でした。日本とは異なった食べ物、食べ方、すごく新鮮でした。

印象的だったのがやはりトイレとお風呂です。事前研修などで話は聞いていたけど、いざ活用となると、すごく勇気がいりました。トイレは、そこまで

抵抗はなかったけど、お風呂には少し困りました。お風呂と一言で言っても日本のように湯船にお湯がためてあるわけではなく、タイでは、水浴びをします。

このように、私は、ホームステイをして、タイの国の文化を知ることができました。また、最後の夜にメイに教わりながら（ヒヤヒヤしながら）タイ料理を作ったことが一番の思い出です。メーカンポーンのお父さんとお母さんには本当にやさしくしてもらって、別れる時は、本当につらいでした。

また、この事業では、青年海外協力隊の活動を視察しました。プラオで村落開発普及員の藤田可奈隊員を訪れ、実際に婦人グループの人たちと紙粘土で手工芸品を作り、チェンマイ苗畑センターでは、鈴木宏紀隊員を訪ねて、施設を見学したり、一緒に木の苗を植えました。鈴木さんは植林に関する活動をしていて、現在のタイの森林の少なさを大きく取り上げていました。たしかに、飛行機の上から見る限りでも、タイは日本より森林が少ないと思いました。

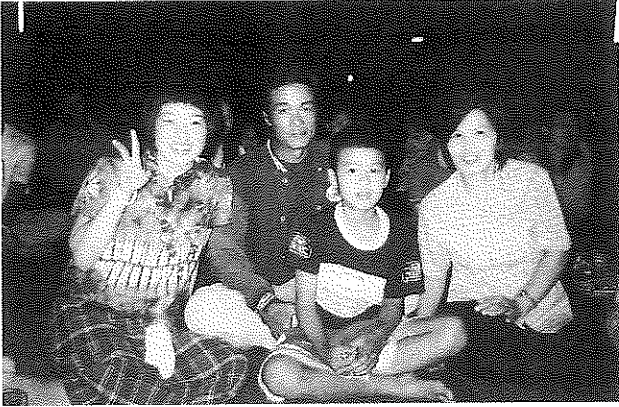
私は今まで青年海外協力隊という言葉は聞いたことはあったけれど、実際どのようなことをするのか全く知りませんでした。だからほんの一部分でもこの2人の隊員の活動を見て、知ることができてよかったと思います。

また、この事業に参加したことで、何でも積極的に取り組もうと考えるようになりました。きっと、タイでの貴重な経験は、将来の自分にもつながっていくと思います。

4日間のホームステイ生活

肥後朋子

(祁答院中学校2年)



「サワッディーカー。」

これは、私がタイ王国に着いて初めて使ったタイ語でした。タイに着いて二日後にチェンマイのメーカンブーン村に行きました。

対面式で誰が私のお母さんかなとドキドキしていたら、とても笑顔の似合う人で、他の家族に会うのが楽しみになってきました。村を見たときバンコクの街とは違い、森に囲まれていてきれいなところだなと思いました。

私が泊まる場所は、集会所から少し離れた所がありました。私は昨年より不便な所だと聞いていたので、わらの家だと思っていたけれど立派な木で出来た家でびっくりしました。第1回、第2回の研修で習った自己紹介を片言ながらも、なんとか練習したとおりできてホッと安心しました。ホームステイ先の家族は、父・母・子供2人の4人家族でした。弟にお風呂とトイレの場所を教えてもらい、早速初めてのタイ式のお風呂を使ってみました。お湯のつもりでおもいきり体にかけてたら、すごく冷たくて、おもわず叫びたくなるような冷たさでした。でも、あがった後は体が温かく感じました。

ホームステイ2日目、朝早くからお寺に行きまし

た。毛は不浄なものとされていてお坊さんはみんな毛をそって驚くばかりでした。お寺でごはんを食べました。それは私たちがお供えに持っていったごはんとおかずでした。ごはんにおかずをかけて食べる食事でした。中には辛いものもあったけれど、おいしかったです。

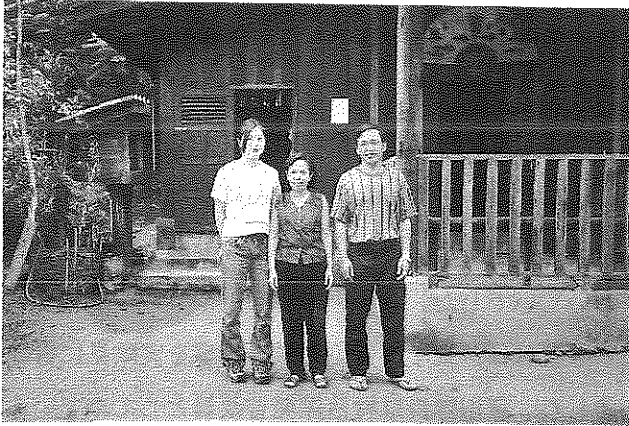
3日目は、青年海外協力隊の仕事を実際見に行きました。藤田隊員は村落開発普及員として来ているそうで今、どんな商品だったら売れるのかなどを考えたり、その商品を売るところを探したりしていると話していました。私の協力隊のイメージは、体力のいる労働だけの仕事だと思っていたけれどこのような仕事もあるんだなと思いました。また違った協力隊が見れてためになりました。協力隊の人たちは自分の仕事に誇りを持ってやっていたので、私も自分の仕事に誇りを持ってやれたらいいなと思いました。私の将来の夢は私の家が農業の仕事もやっていることもあって、私も農業関係の仕事がしたいなと思っています。でも、協力隊で農業関係の仕事をするのもいいなと思いました。

今回、タイ王国に来て学ぶことが多くとてもいい経験になりました。でも、もっとタイ語を積極的に話すことができればと後悔しました。これから、勉強をがんばって青年海外協力隊に参加できることを目標にがんばっていきたいと思います。

タイ王国を訪れて

福岡 奈々恵

(財部高等学校3年)



私の今回のタイ王国での体験事業は、「笑顔 … それは何よりも力になる」ということを気づかされることとなった旅でした。

家族に見送られ、鹿児島を飛び立ったその日の夕方には、もうタイの地へ降り立ち、目を見開いている自分がそこにはいました。自分が「タイに居る」という実感が全くわかぬまま1日が過ぎさり、さっそく研修が始まりました。

JICA、TVS事務所の訪問では、タイにおける国際協力の事業概要や、ボランティアとは何なのかという、今現在、この世界中で行われている国際協力の実態や人材の特性まで、私達の身近にあるものなんだということを実感させながら分かりやすく、そして熱く、教えるのではなく、伝えてくれました。私は、帰りのバスに揺られながらタイの街を横目に、「自分は、これからどう在るべきか」と考えるよりも「今在る自分は何なんだ」といういらだちが込み上げてくるばかりでした。

そんな思いのまま、向かった先は、ホームステイ先であるメーカンポーン村。辺りはもうすっかり暗くなっていました。険しい崖に臨み、雨でグショグショになった赤土の山道を、4WDにギチギチになって乗り込んでいる私達は、一本道をただひたすら前へ前へと進んで行きました。すこしばかり荒い道中もなんのその、なぜか冒険心が勝っていました。そして暗い中に見つけた明かりと村の人達の声、そして、私を受け入れてくれる家族との対面、その瞬間、

不安はどこかに消えさり、気がつけば私は、メュー(母)に手をひかれ家に帰っていました。

村に着き、異文化に触れた、私の一番最初の体験は、寺院での集会のようなものでした。お坊さんのお説教をしばれる足を我慢し聞きながら、日本とは違う仏教のスタイルに驚き、ただあたふたするばかりでした。しかし、もっと私を追い込んだものがありました。それは水浴びです。タイは暑い国と聞いていたけれど、村は桜島より標高が高く、涼しいというより、寒いと覚えることの方が大きかったです。秋風の中での水浴びといった感じで、最初の1かけ、ものすごく勇気がいりました。

村で生活を送りながら、私達は今回のメインである2人の青年海外協力隊員の活動視察に行きました。2人に共通していた事は、自分の担当は何であるか、何をすべきかではなく今あるものをどう探ろうかという、明確にされた目的でした。「定められた2年間という短い期間の中で、それぞれの思い=技術をどれだけ、今後活動し続けていくであろう人々に、伝え、育んでいってもらえるか、今はその価値がわからなくとも、永い目で見ればおのずとわかってもらえるだろう」ということを2人の表情は語っていました。そして、今こうして、活動できるのは、現地の人々を交えた、この環境であるということをもっと有難く思っただけで毎日を過ごしているということも。

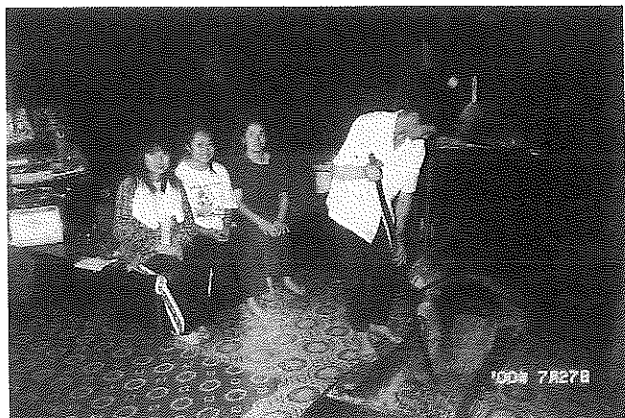
今こうして旅を振り返りながら、一つ一つの思い出をかみしめています。よく人から「今回の旅で自分が変わったなあって思うところがある？」なんて聞かれるけど、それって、ある意味ではすごく失礼な質問だと私は思います。そんな事を聞いてほしくて参加した旅ではないし、要は「何を得たか」ということが重要なんじゃないのかなあ・・・て。

私は、参加することを応援してくれた家族、一緒に同じ時を共有した仲間、そして何よりこの旅に参加しようと思った自分のちょっとした勇気をすごく誇りに思います。

タイで学んだこと

柳田香織

(財部高等学校3年)



7月24日、「第9回青少年国際協力体験事業」の出発の日。その日から1週間、タイに行き、ホームステイや青年海外協力隊の活動現場の見学で多くのことを学んだ。

最初、タイに着いた時の印象は、日本とほとんど変わらない、ということだった。なぜタイが海外からの協力を必要としているのか疑問に思った。その疑問の答えを1週間で知ることになった。

2日目、JICAではタイの現状やこれからの活動を、TVSではボランティアについて教わった。その後、ホームステイをして4日間過ごしたタイ北部のチェンマイ、メーカンポーン村に向かった。村の道は雨でドロドロの赤土と岩のため、移動はトラックの荷台だった。バンコクとの環境の違いは一目で分かった。村に到着したのは夜遅かったため、家族の紹介の後、お風呂、夕食をし、寝るだけだった。しかし、そんな日常的なこともこの村ではとても苦労した。村はタイといっても北の高い位置にあったので、お風呂の水あびは本当に寒かった。ご飯はおいしかったけれど、言葉が通じないので黙々と食べた。環境も生活習慣も言葉も全く違うこの村で4日間、無事に過ごせるかとても不安になった。次の日

は仏教の日で朝7時に村にあるお寺に集まった。お寺ではお供えをして拜んだ後、朝食をとった。村の人達が神を大切に思う強い気持ちが伝わってきた。その他に村ではお茶のミャン摘み、お菓子のバナナチップ作り、竹細工の体験をした。どれも初めての体験でとても楽しかった。4日間の村での生活で、言葉が通じないことが一番辛かった。でもその中で家族の優しさは十分に伝わった。

現在、タイでは58人の青年海外協力隊が様々な活動を行っているようだ。その中の藤田可奈さんと鈴木宏紀さんの活動現場を見学した。藤田さんは村落開発のためプラオ村で手工芸品などの製造、販売に係わり、収入を増やすための活動を行っていた。私達は色粘土、バン粘土を使ったアクセサリーのデザインを考えた。プラオの人達に少しでも役立てればいいと思う。鈴木さんは現在、25%にまで減少した森林の面積を増やすため、チェンマイ苗畑センターで植林の普及活動を行っていた。このチェンマイ苗畑センターでは苗木の植え方を教わり、実際に苗木を植えさせてもらった。2年後、あの木に黄色い花が咲いた時、また行きたいと思う。

この青少年国際体験事業への参加は私にとってプラスになるものばかりだった。メーカンポーンの人達と出会い、人に親切にすること、一生懸命生きることを学んだ。青年海外協力隊の活動現場を見学して国際協力の大切さはもちろん、自分の仕事を楽しむことの大切さも学ぶことができた。これから将来に向けて、タイで学んだ多くのことを自分のものにして生かしていきたいと思う。

「青少年国際協力体験事業」に参加して

川 畑 亜利沙

(末吉中学校2年)



私は、外国に行くのは今回が初めてで、「タイの人と仲良くなれるかな」「言葉は通じるかな」など心配事がありました。でも出発の日が近づくとつれて不安よりも楽しみで心がいっぱいでした。

そして出発の日、私はワクワクしながら、家族に見送られて、飛行機に乗り、香港経由でバンコクに向かいました。夜はバンコクのホテルに泊まりました。

タイの第一印象は、日本製の車や日本の企業の名前の載った大きな看板がとてたくさんありました。それに、車の混雑も多く渋滞ばかりでした。

2日目、私たちはバスに乗り、JICAタイ事務所を訪問しました。JICAとは開発途上国などの経済や社会の発展の為に、主に技術協力を行っているところで、そこでは、JICAで働いている方の今までの仕事内容などを話してくれました。もう1つのTVSは、タイで活動している民間レベルの協力団体のことです。そこでは、ボランティアのことについて勉強しました。

そしてその日の夕方バンコク→チェンマイ→メーカンブーン村へ行き、ホストファミリーと対面しました。

その日の夜、私にホストファミリーはいろいろなことを話してくれました。自分の家族のことや村のことなど話してくれました。

最初は、言葉が通じなくてとても苦労しました。でも家族の人は一生懸命になって聞いてくれ、とても嬉しかったです。

そして3日目。その日は、朝からお寺に行き、1時間ぐらいお祈りをしました。お祈りが終わったら、お寺でみんな一緒に朝ごはんを食べました。タイの家庭料理は、そんなに辛い料理は少なくともおいしかったです。

そして4日目、5日目には、青年海外協力隊員の藤田可奈隊員と鈴木宏紀隊員を訪問して、2人とも自分の仕事に誇りをもって取り組んでいて、私も将来そういう仕事がしたいと思いました。

そしてホームステイする最後の夜が来ました。みんな学校に集まりさよならパーティーをしてくれました。私は、その日の夜、涙が止まりませんでした。

そして次の日の朝、家族みんなで朝食をとり、寺に集まり、さよならの歌を歌い、車へ乗りました。そのとき、私は、村の人と別れるのがとても辛かったです。そして村の人たちと別れ、チェンマイに行きました。

私は今回この事業に参加して、日本では得られないことをたくさん得られて貴重な体験ができたと思います。

今回の思い出は、一生の宝物になりました。

「青少年国際協力体験事業」に参加して

堀内 みなみ

(末吉中学校2年)



私はこの夏休みを去年とは違った有意義な夏休みにしようと、この国際協力体験事業に参加しました。タイに行く前には2回ほど研修があり、嶋崎ジャルワンさんにタイ語を覚えてもらい結団式ではタイ語で自己紹介をしました。この体験事業で私が初めてしゃべったタイ語はサワディカー（タイ語によるあいさつ）でした。

タイに着くと1日目はホテルに泊まり、次の日からはメーカンポーン村でホームステイをしました。私はこのホームステイにたくさんの不安をもっていたのですが、そんな不安はホストファミリーが消してくれました。しかしさすがは外国なので、日本と違う面がいくつもありました。まず、お風呂というのがなく、桶に溜めた冷水を体にかけるのが、日本でいうお風呂なのでした。そして次に、タイの人々は熱心な仏教徒で、毎朝寺院に集まってみんなで僧侶の話聞くのでした。そして最後に私が一番大変だったことは言葉が通じないことでした。タイ語帳と身ぶり手ぶりをしてやっと分かってもらえる、という感じで言葉ってこんなに役に立っていたのかあ、と改めて実感させられました。4日間というのは本当に短い期間でホームステイはあっという間に終わ

りました。私はこのホームステイでお母さんから「優しさ」というものを得ました。お母さんはとても優しい人で別れ際には「メェラックミナミ（母愛してるみなみ）」とまで言ってくれました。これは私には忘れられない思い出となりました。

ホームステイの他に私にはもう1つ思い出となったことがあります。今回見た2人の青年海外協力隊員のことです。2人の方はそれぞれやっていることは違いますが、2人とも自分の仕事に誇りをもって生き生きと仕事をしておられる姿は言葉じゃ言えないほどの衝撃をうけました。藤田可奈隊員は婦人グループの収入を増やすために手工芸品の開発などをやっておられ、鈴木宏紀隊員は森林不足の場所に植林育林などをやっておられます。誰かが藤田隊員に「この仕事が嫌になった事はありますか。」と聞いたところ、藤田隊員は「ハイ」と答え、「でも止めたと思ったことはありません。」と言いました。

私は今中学2年生です。そして来年は受験、自分の将来を考えなければならない時期に来ています。今、この時期にこの体験ができたことに感謝しています。なぜならば「青年海外協力隊」という素晴らしい仕事を知ることができたからです。将来のことはまだまだ分からないけれど、私は藤田隊員や鈴木隊員のように、自分の仕事に誇りを持って働ける人になりたいと思いました。社会の教科書でしか知らなかったタイ、日本と同じアジアの中のタイ、教科書だけでは決して分からない心の豊かさを教えてくれました。このチャンスを生かして前進して行きま

「青少年国際協力体験事業」に参加して

宮原 亜弥

(南之郷中学校2年)



まず、私がこの事業に参加した動機は単純なことに、「海外に行ってみたい」というものからでした。動機は単純ですが、この事業に参加した私は、一回りも二回りも成長したと思います。

タイを訪れて、私の中のタイのイメージとかなり違ったことに驚きました。なぜなら、交通渋滞はすごいし、ビルは沢山建っていたからです。あと、街中にお寺があり、仏教を深く信仰しているんだなと思いました。それに、朝になるとお坊さんは、壺のような物を持って歩き、食べ物をもたらうのです。タイの人達は、お坊さんを敬っているのだなと感心しました。

7月25日、ステイ先であるメーカンポーン村のホストファミリーと対面した。お母さんはとても優しい人だったので安心しました。

ホームステイで困ったことは特にありませんでしたが、大変だったことがあります。一つはお風呂です。村ではお風呂ではなく水浴びなのです。覚悟はしていたものの、水浴びは寒くて辛かったです。二つめは洗濯です。洗濯機がないので、自分で手洗いしなければいけませんでした。でも、慣れてくると楽しかったです。

食事はご飯(タイ米がモチ米)の上におかずをのせて食べます。食後には必ずフルーツが出ました。

7月27日と28日は青年海外協力隊の活動視察をしました。藤田可奈隊員も鈴木宏紀隊員も仕事の内容は違うけれど、とても自分の仕事にやりがいを感じているそうです。現地の人とのコミュニケーションは難しいけれど楽しいと言っていました。

私には、二人の隊員がとても輝いて見えました。とてもかっこよく見え、将来、私もあんな風に、自分の仕事にやりがいを持つたかなと思いました。

この事業に参加して、私は多くのことを得たと思います。一つ目は、人とのコミュニケーションのとり方です。言葉が通じないからとだまりこむのではなく、ジェスチャー混じりで自分の意志を相手に伝えたり、共通の話題をもち、一緒に遊んだりするのです。私は、タイ語を上手に話せなくて、タイ語混じりの日本語とジェスチャーで話して、意志が伝わったときは、嬉しかったです。

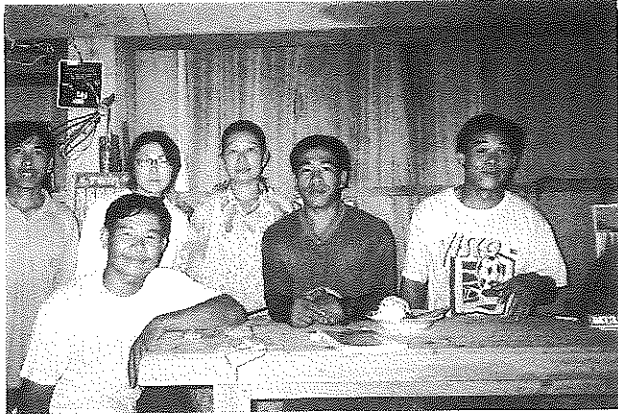
二つ目は、自分の将来についてです。今までは、海外で働くのって難しそうと思っていましたが、協力隊員の働く姿を見て(仕事に国境はないんだ。海外で働くのは難しいことじゃないんだ)と思えるようになりました。

私は、この事業に参加して本当によかったと思います。いい体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

タイ王国チェンマイを訪ねて

南 佐貴子

(鹿屋中央高等学校3年)



今回この事業に参加させてもらった事を感謝しています。

タイ王国へ行き、青年海外協力隊の活動を見て聞いて体験して感じた事は、国際協力というのは意外と身近にある事だと気づいたことです。自分も頑張ったら出来る事じゃないかと思いました。

藤田可奈隊員の所では、村落開発のために行われている粘土細工がものすごくリアルだった事に驚きました。自分たちも粘土細工のアイデアを出し合いました。それが役に立ったかは分からないけど、少しでも役に立ったらそれも国際協力だと思います。

鈴木宏紀隊員の所で話を聞いた時は、タイの森林が国土の23パーセントしかないと言う事に驚きました。チェンマイの森林の割合は70パーセントだそうです。そう言うわけでチェンマイは、タイ王国全土の重要な役割をしているそうです。チェンマイに苗畑センターがある理由は、タイ王国全土の水源になっている事。チェンマイを中心に木に対する多くの情報を広げる為だそうです。

協力隊員の活動や話を聞いて驚くことばかりで自分の知識のなさに情けなくなりました。国際協力の活動をするには、もっと色々な知識を蓄えないと、

と思いました。

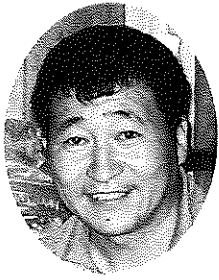
ホームステイ先でも、日本とタイ国の文化の違いを知らなさすぎたと感じました。大きな違いが水浴びをする習慣です。知ってはいたけど寒かったです。でも、水浴びにも慣れました。

藤田隊員の所を訪ねた時、村の人たちと自分たちの考えが違ふと感じました。粘土細工をするとき、自分だったらこういうのがほしいと考えて作ればという意見に対して、藤田さんから返ってきた答えは、彼女たちは、売れる物を作って売り、食べ物を買って栄養をつけたり、子どもにいい教育を受けさせたいと思っている。だから副収入を得るためにこのような活動をしていると言われたとき驚きでした。村の人からしたら自分たちの環境っていうのは、ものすごくぜいたくなことだと思います。その環境を活用できていない自分はすごく損だと思います。今回、この事業に参加して得たことは沢山あります。一番大きかったのは、どんな人に対しても優しく接することです。自分がそう接してもらったように、自分も優しい気持ちでいろんな人たちと接したいと感心させられました。

それに、この事業に参加したことでこれからの進路の幅が広がったというか、自分はこうなりたいというのが分かったような気がします。これからもっと勉強して、将来私は多くの人に「食」のことで教えられるといいなと思います。

第9回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて

団長 溜池 秀美



中学生4名、高校生10名の団員はタイの言葉や文化、習慣など2回の事前研修を一生懸命こなし、心をつちにして出発した。バンコクは猛烈な暑さで海外が初めての子供たちにとってはかわいそうぐらいだった。

次の日、バンコク市内で、JICA事務所とTVS（タイボランティア協会）を訪れ、JICAでは、事業概要の説明を聞いたりTVSではボランティアは自分のことから行動に移すことだと教わった。

ホームステイ先となったメーカンポーン村は、チェンマイから50kmほど北に位置し、村は100年ほど前チェンマイのドイケサット地区からきた人たちが集落を作り、またラオ族やクメール族が住み着き村が広がった。現在村には126世帯414人が住んでいる。

この村のほとんどがミイヤンというお茶作りに従事している。この村に来る日本人は今回が2回目で以前は東海大学の学生がホームステイしたことがあるそうです。

この村のホームステイ中、お茶摘みや、バナナのお菓子作り、漢方薬作りの作業場の見学、バンブーハット〔竹帽子〕作りに挑戦した。また、団員が寄付した資金で建てられた休憩所を、村の人と力を合わせて作り、完成させた。

水浴びの水は濁り冷たく、トイレで用をたした後は紙もないためヒシャクを使って自分で流さなくてはならないなど不便な事が多い中、日本と異なる生活環境や習慣を、素直に受け入れてくれた。夜各ホームステイ先の家を廻ってみると一生懸命家族と話そうと、本を片手に頑張っていたり、いっしょに料理を作ったり手伝いもしていた。ほとんどの人が日常生活は不便に思いながらも、今まで味わった事の無い家族の絆や人間関係の愛情を感じていたようだった。

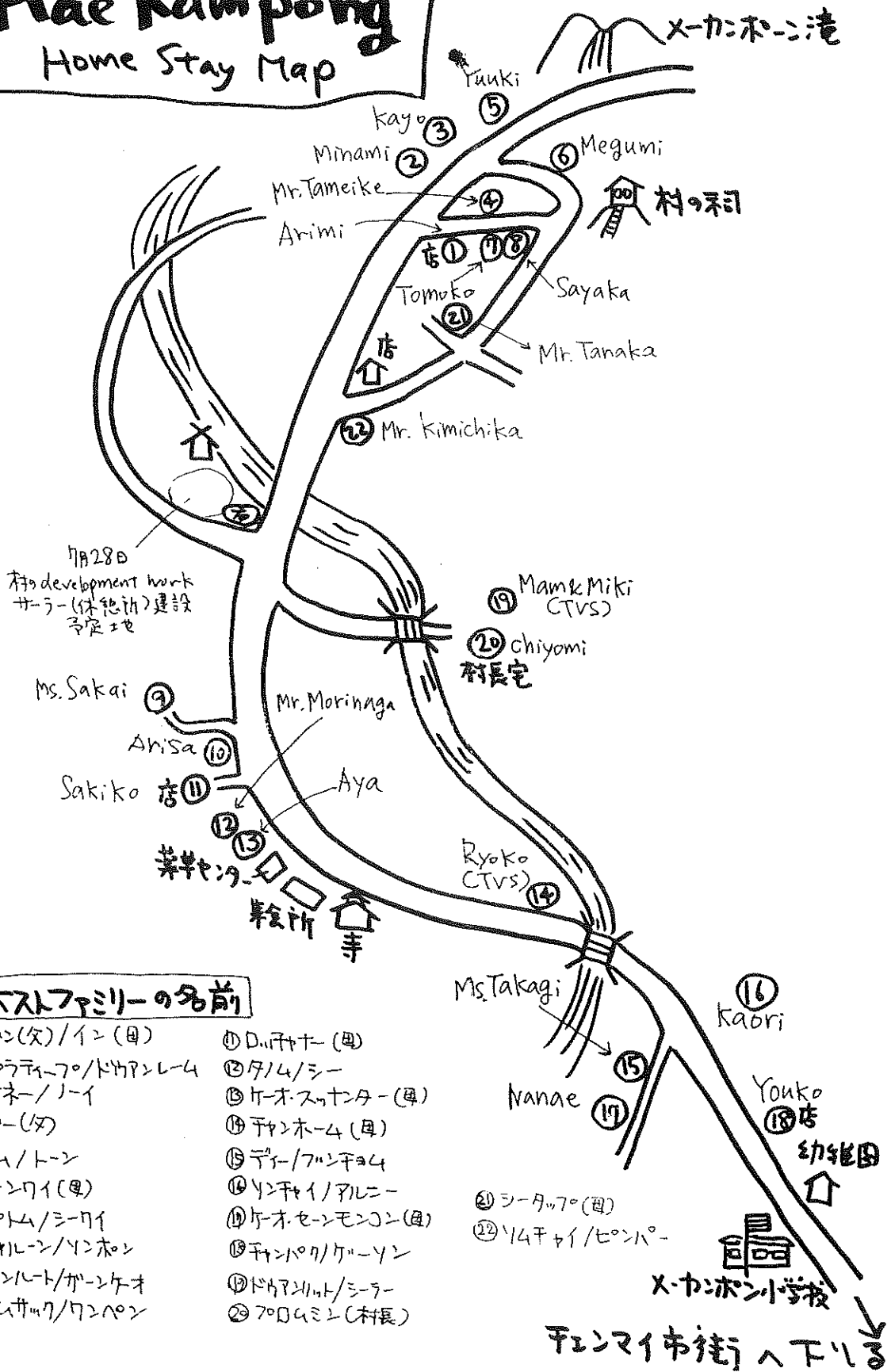
ホームステイ中2日間にわたりプラオ社会開発支援センターで、紙粘土でハシ置きや小物などを作ったりする村落開発普及員の藤田隊員と、チェンマイ苗畑センターで花木植林の指導をしている鈴木隊員の活動現場の視察などを行った。

協力隊員たちが地域の生活に密着した仕事をしている様子を見て、団員たちは国際協力をとっても身近なこととして捕らえるようになったようだ。これから自分を磨いて、自信を持って楽しめる仕事を見つけ、いろんなことに積極的にチャレンジしようと思ったり、将来、協力隊に参加したいという感想を持った団員もいた。

この貴重な体験は、きっと団員の将来に大きな影響を与え、各分野の国際協力で活躍する鹿児島県出身者が一人でも増え、これからの人生に生かしていただけることを確信し、メーカンポーン村、TVSスタッフ、実行委員会の皆など、この事業の実施に当たり、御支援、御協力いただきました方々に心から感謝申し上げます。

メーカンポーン村ホームステイ先配置図

Mae Kampong Home Stay Map



ホストファミリーの名前

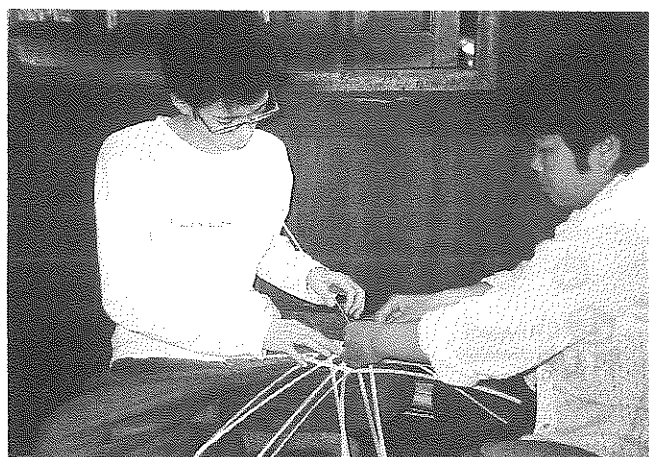
- | | |
|-------------------|---------------------|
| ① アニ(父)/イニ(母) | ① D. マチナ (母) |
| ② マウチー/マウ/トクアパレ-4 | ② タノ/ミ |
| ③ サネー/ノイ | ③ ケ-オ-ス-マ-タ- (母) |
| ④ タ- (父) | ④ マンホ-4 (母) |
| ⑤ カム/ト-ン | ⑤ デー/ア-ン-フ-4 |
| ⑥ ノ-ン-ワ-イ (母) | ⑥ ヴン-チ-イ/ア-ル-ニ- |
| ⑦ ノ-ム/ミ-ワ-イ | ⑦ ケ-オ-セ-ン-モ-ン-ン (母) |
| ⑧ マ-ル-ン/マ-ン-ホ-ン | ⑧ マ-ン-パ-ク/ケ-ー-ン |
| ⑨ ア-ン-ル-ト/カ-ン-ケ-オ | ⑨ ド-ク-ア-リ-ット/シ-ラー |
| ⑩ ヴ-ム-サ-ク/マ-ン-ハ-ン | ⑩ マ-ン-ク-ミ-ン (村長) |
| | ⑪ シ-マ-70 (母) |
| | ⑫ ヴ-ム-サ-ク/マ-ン-ハ-ン |



お寺に食物や花をお供えする



お経のあと皆で食べた食事



竹の帽子の編み方を習う団員



メーカンポーン滝の周りに木を植えました



ミヤンの収穫を手伝っています



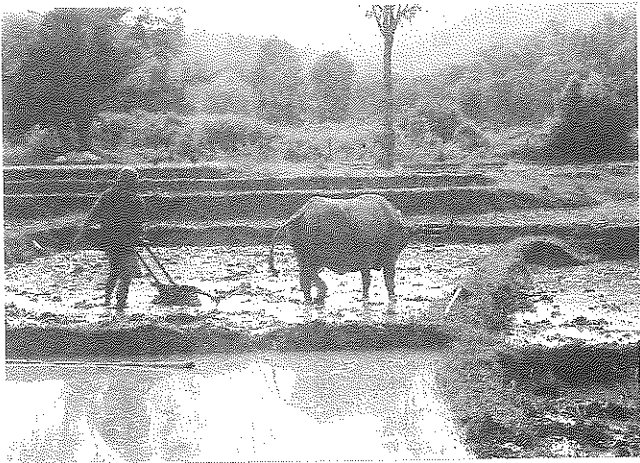
まだ青いバナナをスライスしてバナナチップを作りました



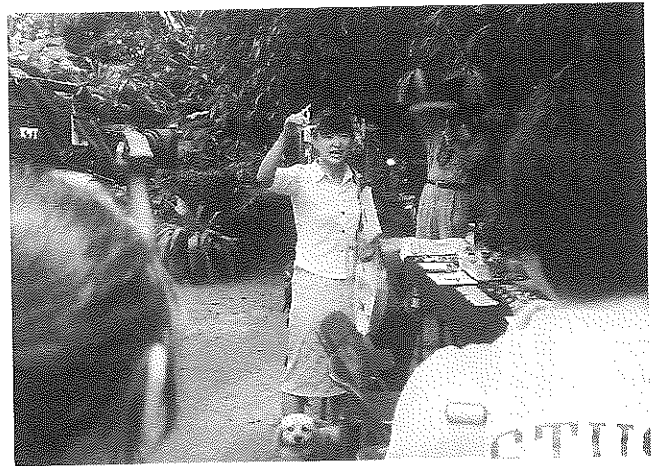
小学校での交流



子供達からのリクエストで日本の歌を歌いました。



プラオへ向う途中にて



皆に粘土で作った商品を説明する藤田隊員
(手にしているのは8月12日タイの母の日に贈るプレゼント)

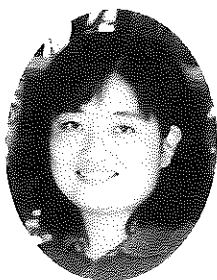


タイの木について説明する鈴木隊員



鈴木隊員が作った啓発用ポスター

同行者一口メモ



鹿児島県青年海外協力隊を
支援する会

(JICA国際協力推進員)

酒井 マリ

〈うらやましかったこと〉

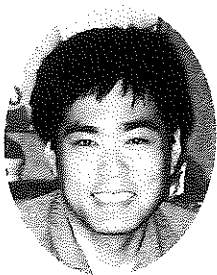
鈴木隊員、藤田隊員のお二人のイキイキした表情、飾らない言葉がとてもステキだった。自分が協力隊員だった頃、こんな表情をしていたらどうか？

〈つらかったこと〉

「早くしなさい」「静かに」「危ないからホテルから外出禁止」ついつい団員たちに大声を張り上げてしまう。子供たちを信じて、自主性を尊重して……なんて思っただけでも、ついつい大人の都合で管理してしまう。大切な子供たちを預かるという責任の重さを痛感。学校の先生はエライなあ。

〈うれしかったこと〉

日本に帰って1ヶ月後、今度はマレーシアの青年21名を鹿児島で受け入れるという事業を担当。ホームステイ先を探すのにずいぶん苦労したのだが、一人の団員の家庭で早く受け入れてくれた。いよいよ彼らの「ボランティア実践編」が始まったようだ。



(財)鹿児島県国際交流協会

森永 靖志

まずは、この鹿児島県青少年国際協力体験事業に御協力・御理解をいただいた関係諸団体の皆様本当にありがとうございました。

そして、2回の事前研修やタイでの交流等を通して成長した団員の皆さんカッパンカップ。一緒に過ごした8日間は僕にとってもかけがえのない体験となりました。

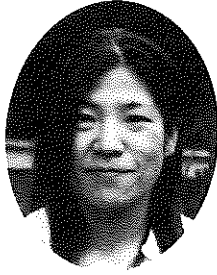
さて、現在の若者の目は残念ながらアジアではなくて、欧米に向かっているように思われます。

若いうちから、アジアの農村へ興味をもってくれた今回の団員は貴重な存在でした。なぜならこの事業に応募する中高生は非常に少ないからです。

この事業から帰ってきた団員は口を揃えて、必ず言います。「あの村にいつかきつと帰りたい」と。こんなに感動したり、日本人が忘れかけている色々なものを気付かせてくれるいい事業なのにもっといろんな子どもたちが参加してくれるといいのと思います。先進国を見て勉強することは、一杯あります。でも、タイのような途上国、それも農村の生活を体験することは、それにも増して意義のあることだと思います。それに、初めての海外渡航にこの事業でタイへ行ってくれた団員の皆さんは、本当に勇気のある持ち主であると思います。行く前は、期待と同時にいくつもの不安を抱えていたことでしょうね。

この事業で見たり、聞いたりした8日間の体験は、“この夏だけの宝物”にしないで、この事業を糧にこれから先も国際交流・協力で少しでも興味を持ってください。町で見かけた困った外国人や日本人分け隔てなく親切にできる本物の国際人になってください。

そして、これから先いくつもの岐路で難しい選択をしなければならない場面が訪れます。そんな時に、この夏タイへ行った経験が何かの手助けになれば幸いです。



青年海外協力隊OG
高木 優美

緊張していた表情が少しずつ笑顔に変わり、積極的に話しかけ交流していく姿に驚かされました。皆、とにかくよく食べ、よくおしゃべりし、よく笑ったよね。自分が協力隊員として派遣されたばかりの頃を振り返り「負けた！」と思いましたよ。言葉や文化の壁に惑い、悪戦苦闘しながらも現地の人々の暖かさに触れ、交流してきたこと、そして現地で悩みながらも生き生きと活動している隊員の姿に直に触れたことで、それぞれの胸にまた一つ将来への選択肢が広がったのではないのでしょうか。皆さんのこれからがとても楽しみです。私自身も隊員や皆さんの頑張りに刺激されいっぱい元気をもらった旅でした。

帰国したばかりの私に声をかけ、この事業の一員として参加させてくださった関係者の方々に感謝すると共に、今後もこの事業を通じて、多くの鹿児島県の学生達が感動体験し続けることを心から願っています。



南日本新聞政経部
寺原 公睦

「ほほえみの国がぼくらを変えた」。今回、同行記にそう題名を付けた。この旅を通して最も強く感じたことだった。確かにみんな変わった。何より、笑顔が素敵になった。

タイ・メーカンポーン村の人々をはじめ、青年海外協力隊の藤田可奈、鈴木宏紀両隊員らと接するうちに自然と学んだのであろう。事業の目的である「体験」、直接目で見て、肌で感じるということがいかに大切かを改めて思った。

みんな一見、線が細く、何事にも無関心に見える。が、心のうちではいろんなことを感じ、考えていた。不便の上ない村の生活でもみんなが協力して肩を寄せ合い暮らす温かさを敏感に感じ、「帰りたくない」と流した涙。現代の薩摩隼人、薩摩おごじよたちも捨てたものではないと感じている。

さて、振り返って自分が何が変わったのか考えた。一つあった。体重。わずかながら減っていた。タイの暑さと規則正しい生活のおかげ。しかしそれも今、怠惰な日本の生活にどっぷりつかり、もとのもくあみになっている。

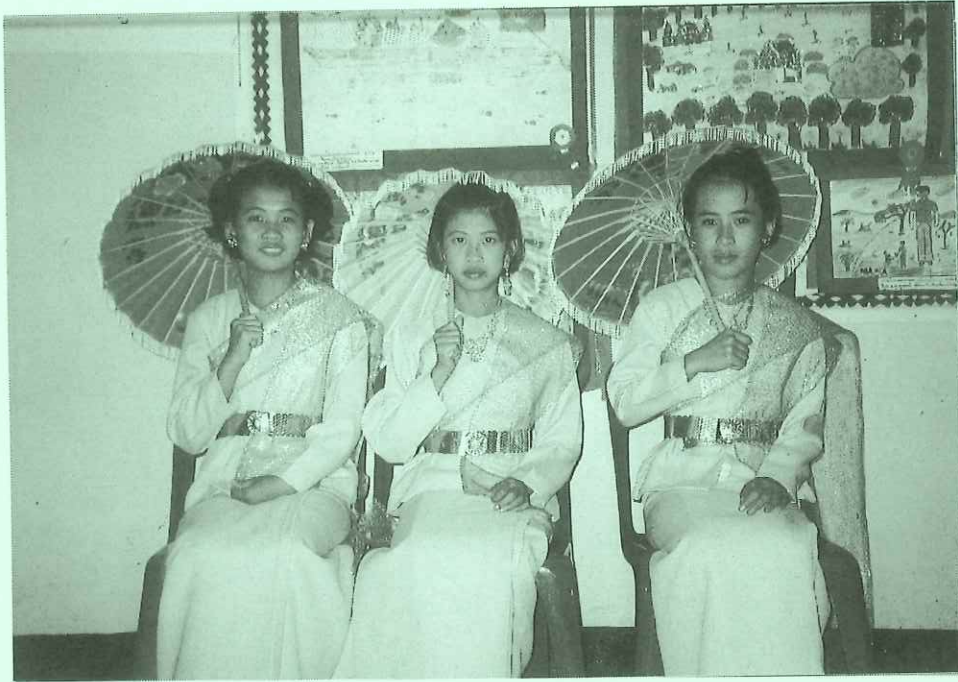


KYT鹿児島読売テレビ
報道制作部

田中 省吾

「サワディーカップ」十数年？振りに語学を勉強し、ようやく少し覚えたタイ語でホストファミリーに緊張の挨拶。取材で自分もホームステイするのは、報道の仕事12年の自分にとって初体験。しかもタイ北部の山奥の農村、最初は取材をしながら自分のホストファミリーの人とうまくやっていけるのか、機材の管理など不安が頭をよぎりました。メーカンポーン村で中高生14人が日に日に生き生きした表情になったのとあわせるように、自分も異文化の体験を楽しみながら取材を進めました。久しぶりのカメラで、さらに1人取材とあって肉体的には厳しいものがありましたが、自分で見て感じたものをより近い形で映像表現できたと思います。当初の予定を大幅に越える5回シリーズで、1時間

番組並みの時間放送出来たのも、14人がそれぞれタイからすばらしい何かを受け取り、大きく成長した賜物です。メーカンポーン村の皆さん、団長、団員の皆さんありがとうございました。



Jan Rak Mae Kampong

第9回 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

編集発行 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

平成12年11月
